JAPANESE TABLEWARE

Catalogue No.
20153-3

本物であること

すべては人との出会いからはじまる

用と共鳴と美の

建築はいわば舞台。
季節や行事によって舞台を変えていく。

用美：前田先生は伊勢に本拠を構え、地元の職人さんで組織する「暮らし十職」を率いて、和風建築を数多く手がけていらっしゃいます。まず、日本の伝統的な建築についてお聞かせください。

前田：日本の建築は、すべてにおいて背景です。住まいの主人公はそこに暮らす人々です。住まう人々が主役なら、建物はいわば舞台と言い換えてもよいでしょう。日本の建築に、家具というものがあまり存在しないのもこのためです。畳があって、建具があり、あとはがらんどう。季節や行事によって、どんどん舞台を変えていく。たとえば、お正月やお盆など、年中行事を行なうときには、その都度道具をしつらえ、その場を創りあげます。お正月のお膳や夏の家具など、年中行事に使う道具をしまっておく蔵もあり、その一瞬だけの空間を即座に演出することができます。これが西洋なら、ダイニングルームには必ずテーブルと椅子などの家具が常時置かれています。日本とは対極の暮らし方ですね。

用美：ひな祭りや端午の節句など、ハレの日の演出の仕方も、和風建築と密接な関係があるのですね。

前田：その通りです。ハレの日を演出してきたのは、道具を作ってきた職人さんでもあり、日本人はその道具を上手に使いこなしてきました。日本の伝統建築には、そんな日本人の繊細な感性が細部にまで反映されています。茶の湯は、こうした日本人の感性をまとめあげた体系だといえましょう。

用美：前田先生は茶の湯にも精通されていますが、茶の湯を始められたのは建築がきっかけですか?

前田：以前から、茶の湯に興味をもっていました。南方録という茶の湯の聖典と言われている書物がありますが、それを読むと、単に茶法のことだけではなく、「もてなしの心」について書かれています。私が師事する中村昌生先生は、茶室の研究では日本の第一人者であり、京都工芸繊維大学の名誉教授です。あるとき、京都の大徳寺で催された「夜咄の茶」に招かれたことがありました。これは夜の茶会なのですが、暗い部屋にろうそくを点し、釜の音だけが聞こえ、湯気がゆらめく天井には四隅の闇がある。「侘び」を重んじる日本人の精神を目の当たりにして、感動を覚えました。今から思えば、お茶の世界と出会ったことが、日本の建築へ大きく目を開かせたきっかけになったのかもしれません。

用美：日本人の生活スタイルも変わりつつありますが、現在、日本建築はどのような状況なのでしょう?

前田：残念ながら、現在の日本建築から大工の技術が消えようとしています。昔は地域ごとの特色がありましたが、今ではどこへ行っても同じ建築です。特に木を扱う木造住宅は、みなメーカーのものになってきており、国籍がないような住宅ばかりです。だんだんと、自分たちの手から日本の建築がこぼれ落ちています。昔は、大工や家具、什器など、いろいろな分野の職人がいて、こんな家、こんな家具がほしいといえば、作ってくれる人々はたくさんいました。ところが今は、職人の絶対数が減ってしまって、それを実現することがなかなかできません。和風建築の良さや雰囲気は、誰もが知るところですが、いざ、建てようとするとそれはできない。建築にあたっては、よほどしっかりとした考え方や材料の見方、寸法のことが分からないとできるものではありません。土壁があり、柱があり、木があれば、日本の建築かといえば、そうではありません。もっと繊細に緻密に組み立てられています。私はもともと東京で、オフィスビルや結婚式場、学校など、大きな建築ばかり手がけてきましたが、経済観念が優先する現代建築よりも、日本の建築に取り組みたいと思うようになり、京都へ本拠を移しました。風が吹き抜けて、光が降り注ぐ…。それこそ日本本来の建築の姿だと思います。日本の伝統技術の良さをぜひ後世へ残していきたいものですね。